



おくの かよ

奥野 佳世 氏

生 年 昭和26年

住 所 田辺市龍神村東

昭和26年、大阪市に生まれる。昭和50年、武蔵野美術大学を卒業後、大阪の公立中学校や高等学校にて美術指導を行いながら、画家として活動を始める。

氏自身、「山奥の空気と水の美しい自然に囲まれた芸術村に住んで創作活動をする」というイメージを思い描いていたところ、昭和58年、龍神村で廃校舎の活用と芸術による村おこしを目的とした龍神国際芸術村が開村した。そして、その後、氏の個展に来場した芸術村村長から誘いを受け、芸術による村おこしに魅かれて移住を決断、昭和59年に職を辞して家族で大阪から龍神村に移り住み、龍神国際芸術村の運営に携わることとなる。

移住から程なくして、龍神村には「山路紙」と呼ばれる和紙作りの文化があり、古くから紙漉きが行われ、山村の暮らしと共にさまざまな用途に使われていた事を知り、伝統ある山路紙を復活させたいと決意し、活動を開始した。

幸い、地元には紙の原料である楮^{こうぞ}の生産農家が残っており、紙漉きの方法や、紙漉き道具などについて、先人から教わり、やがて、自ら紙漉きを実践して山路紙を復活させ、さらには、草木染による創作活動を開始し、和紙を用いた表現へと発展させ、その活動は現在に至る。

氏の主な活動は山路紙の草木染で、自然の染料で鮮やかな色の紙を作り上げていく。用いる染料は、コブナグサ、アカメガシワなど天然のものを採取し、また、タデアイ、アカネなどの植物のほか、時には土を混ぜたりするなど、「自然の恵みでどれだけ色彩豊かな表現ができるか、どれだけ一体になれるか」を心掛け、古くからの方法に学び、自然に向き合った創作活動を大切にしてきた。

平成4年から取り組んでいる地元小学校での6年生の卒業証書作りの指導は、これまで31回を数えるなど、長年にわたり地元小学校が地域学習や森林学習の一環として実施している授業の講師を務め、和紙作りの工程や紙の歴史のみならず、楮の収穫などから循環型社会のあり方を伝えるとともに、山村の自然・文化や森林の働き、暮らしの安全と豊かさに深いつながりのある森づくりの大切さを子供たちに伝えている。この取組が評価され、令和3年には地元小学校が和歌山県から優れた環境保全活動をしている団体として「わかやま環境賞」を受賞するなど、地域に根ざ

第 55 回（令和 6 年）

した取組は着実に実を結んでいる。

平成24年には公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団から助成を受け、平安時代の宮廷の女性たちが用い愛でた草木染手漉き和紙をテーマに研究を行うなど、創作技術の向上に邁進するとともに、平成30年には中国上海市のギャラリーにおいて二人展を開催するなど、氏の作品は海外でも注目されている。

このほか、氏は自然素材を使ったものづくりをコンセプトに、「手づくりクラブ」や「糸つむぎの会」を設立し、環境に配慮した暮らしの提案を行う活動を続けており、日本の在来種「和綿」の種の保全活動や、廃油を使ったせっけん作りなど、地域に根付いた持続可能な循環型の地域づくりにも尽力している。

人と人とのつながりを大切にしてきた氏の活動は、その後、多くの人が龍神村に移住するきっかけとなるとともに、都市部からの移住を経て山路紙を復活させ、さらに和紙芸術へと発展させるなど、長きにわたり和紙文化の普及と発展に努めてきた氏の功績は誠に多大である。

（略 歴）

昭和26年 大阪市生まれ
昭和59年 大阪府東大阪市から日高郡龍神村（現田辺市龍神村）に転入

（学 歴）

昭和50年 武蔵野美術大学造形学部美術学科油絵専攻卒業

（主な活動等）

昭和59年 アートスペース虹（京都市）において個展を開催、来場した龍神国際芸術村村長 嶋本昭三氏から活動への誘いを受ける
龍神村に移住、龍神国際芸術村アートセンターにおいて村おこしの活動を開始 紙漉き、草木染による創作活動を始め、以降、紙漉きワークショップ・展覧会を各地で開催、現在に至る
龍神村内で絵画教室を開催、現在に至る
平成4年～ 地元小学校6年生の卒業証書作りを指導、現在に至る
平成18年～ 和歌山大学紀南サテライト授業「現代社会と紙漉き」開講（～平成19年）
平成24年 公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団の助成を受けて、「雁皮、楮による草木染手漉き和紙薄様の研究製作」を行う（～平成26年）
平成30年 二人展（中国 上海市）を開催

（役職等）

平成12年～ 龍神村アートセンター「糸つむぎの会」代表
平成19年～ 田辺市龍神公民館東西分館 分館長（～令和5年）

（受賞歴）

平成29年 田辺市社会教育功労者表彰（分館長勤続10年）
近畿公民館連絡協議会優良職員表彰（分館長勤続10年）
令和5年 田辺市市政功労者表彰（教育功労）